リじゃが芋を失敬して、鍋で煮て飢えをしのいだ。近所の人のいいロシア人が、時々、パン屑やトマト等持参してくれたこともあった。個人的には実によい人ばかりだのに。

夜になると食べ物の話ばかり、アベカワが食べたい、せめて干飯を腹いっぱい食べたい等。そういえば、入ソ以来三度、砂糖の配給はあったが、菓子は一回も食べていない。路上に転がるれんがが黒パンに見えて拾いそうになったことが何度かあった。ああ、早く日本に帰りたい。そして腹いっぱい食べたい。こんな小さな望みしか我々にはなかったのだ。

私の抑留体験記

新潟県　宮田佐一郎

我々の部隊は、ソ連の参戦が予想されるや、急遽、北支から満州に転進し、対ソ戦車戦闘訓練に明け暮れていたが、ソ連の侵攻が近づくや、奉天防衛のために奉天東北方の台地に陣地構築中、突如終戦となった。部隊は早速終結して、奉天郊外に引き上げ、幕舎生活をして、ソ連軍の武装解除を受けた。

これまでは、命令一下、一糸乱れずすべてのことが運ばれて来たが、これから一体どうなるか、今や精神の支えもなく、急に命が惜しくなり、だれしもが内地の家族が恋しく、一日も早く帰りたいと願うのみであった。

現地の中国人（満州人）たちは、掌をかえしたように、積年の恨みを一挙にはらさんと、日本人に暴行を加えたり、日本の建物を打ち壊したり、倉庫を襲撃して食糧や物資を持ち去ったり、目も当てられないありさまであった。

こんなとき、当然デマ宣伝が流れる。日本兵は全部ソ連領シベリアへ連行されて殺されるか、生涯労働に従事させられる等々、兵たちの不安は尽きない。市街へ使役に出た兵が逃亡した。彼は若干中国語ができることもあって、中国に永住する覚悟らしかった。食物も急にコーリャン飯に変わった。精白してあったが、まずくて食べられない。

九月十日、奉天出発、満鉄の列車に乗せられた。マンドリンを肩にしたソ連兵の監視の下に、日本へ帰る夢は薄らぎ、次第に寂しさが襲って来る。ダモイトウキョウとしきりに言うが、逃亡兵の出るのを警戒してのことと思われた。

列車は走ったりとまったり、車外はほとんど見えない。夜間急射撃の音は、シベリア行きを恐れての逃亡である。列車は黒河駅に至り、船でアムール河を渡り、ブラゴエチェンスクよりシベリア鉄道に乗る。内地帰還は全く絶望となった。

コックリさんをした兵がいて、九月二十六日に乗船して内地に帰れると言っていたが、偶然アムール河を渡った日が二十六日であった。その兵はシベリアに着くころは心身とも衰弱して、その冬を越せず、寂しく死んでいった。最後の水をやったが、毛布一枚のみで棺に入れられ、馬そりで引かれていったが、墓地までの送りは拒否された。

バイカル湖の波際を経て、十月五日、二十五日間乗った列車から小さい町のウスリー駅に降ろされ、広漠たる丘に建つ木造平屋の収容所に入った。衛門があり、四隅に見張り兵の立つ有刺鉄線の回された土間の建物の中に、木造の二段ベッドがあった。逃亡を極度に警戒し、朝晩の点呼は必ず行われた。

しばらくして分隊、小隊くらいずつに分けられ、屋外作業に出された。もちろん、監視兵つき。作業、いわゆるラボートである。作業には必ずノルマがあり、一〇〇%に達しないと、普段でも質の悪い給養をさらに悪くし、少ない量をさらに減らされ、そのうえ口癖のように「東京ダモイを遅くする」と兵たちの一番嫌がる意地悪いことを言う。

ドロドロの皮つきのコーリャンがゆ少量に、マッチ箱二つくらいの黒パン、副食にはキャベツに馬鈴薯少々、肉魚類は至って少ない。味噌醤油は一切なく、わずかの塩と、時に少量の砂糖くらいのものである。

気温は日一日と極度に下がって、零下二十度、三十度、最低五十五度まで経験した。このため栄養失調で体の肉はげっそりとやせ落ち、歩行も困難になってきた。顔だけは青白くふくらみ、二十歳、三十歳代の若者の面

影はさらになく、六、七十歳の老人の姿であった。

零下三十度になると、屋外作業は中止であるが、ペーチカをたいても室温は零度より上がらない。休んでいてもその寒さ。さらに参るのは空腹である。屋外作業でも、建築基礎工事の穴掘りが栄養失調の体にこたえる。土が一・五メートルも岩のように凍っているのである。いや、岩よりも質が悪い。帰りに衛門で現場監督がくれた作業成績を提出させられる。もちろん六〇%か五〇%である。引率者（当時は将校、下士官）が残されて責められる。

我々の口上は決まっていた。日本人に十分食べ物を与え、室内の暖房をよくせよと。しかし衛兵所にいる小、中尉や下士官連中では、全くのれんに腕押しであった。兵たちにはなるべく体力を消耗させないようにし、現場ナチャルニックには、帰りによいパーセントを書かせなければならない。それにはロシア語が話せなければならない。朝に晩に休日に通訳から教えてもらって勉強である。

私は不幸にして、シベリアに入って少しして発疹チブスにかかり、一か月も屋外に出なかったため、現場監督と話すことが下手で閉口した。従って、ロシア語の勉強は一層重要であった。兵たちがロシア人との交渉のへたな引率者を嫌うのは当然である。

満一年くらいして、町に近い収容所に移動した。我々部隊のラボート成績がよかったのか、待遇改善要求が認められたのか、木造ではあるが、床も壁も窓もある、一応満足できる建物で、暖房もかなりよく、食物も若干よくなったようであった。

しかし、そのころから思想教育が始められた。日本の天皇制、帝国主義についてであった。そのため、将校はじゃまであった。部隊長以下、中隊長くらいまで五人がイルクーツク第五収容所へ送られた。私が教育した召集兵の中に大学出がいたのが当局にわかり、日本新聞を書かされたのを、私が再三忠告したことがソ連将校に告げられたためであった。これが私の内地帰還を早めることになろうとは、まことに世の中のことは何が幸不幸を決めるかわからない。

第五収容所には、ソ連に目をつけられたり、トラブル

を起こしたりした将校ばかり五十人ほどが一室に入れられ、作業もなく、毎日、碁や将棋、カルタに明け暮れていたが、しばらくして希望して屋外の土掘り作業に従事した。忘れもしない二十二年十月、突然列車に乗せられ、ナホトカに送られ、内地に送還された。時に十一月二日、明治節の日であった。

舞鶴より早速家に電話し、父母の健在を確かめた。敗戦、そしてシベリア生活まる二年。幸いにして五体満足で帰り得たことを感謝するとともに、亡き戦友たちのご冥福を心からお祈りする次第である。

シベリアでの食える物あさり

高知県　山本明司

昭和二十年十月二十日ころと思いますが、やっとこの汽車で日本へ帰れるとの希望に燃えて、数か月の疲れも重なり、文字どおりすし詰めの貨車（十五トンの貨車の中に前後両方を二段に、自分たちの兵舎の古材でつくり、その一段に何と十五人が詰め込み、その上それぞれが内地に帰れると思い、欲に集めた荷物もじゃまして、頭足交互で無理して横に重なり合うありさま）の中で、それなりにぐっすり寝込み、夜明けが近いか、大分冷えて来た時分、貨車は静かに止まった。

だれかが二階の天井近くの空気穴からのぞいて、これはいかん、北に走っている、ここはジンギスカンの駅だと悲愴な叫びに、一斉に目を覚まし、ざわめき立った。やがて伝令で大便をする者は汽車の下の方にせよ、汽車より離れてはいけないとのこと。小便は戸のすきまより外にたれ流してきたが、その点、男は便利と思った。

また、一斉に大便のため外に出て見れば、先発隊が随分行ったと見え、地面はすきまのないほどうんこだらけ。それを見てうんこするのをやめる者も多く、我慢できぬ者はやむを得ない、広場で大勢の見る中で大便をしたことはなく、これぞ「出物腫れ物所きらわず」のたとえのとおりと思った。

私たちの車両は大分後ろの方であった。前の車両で便所をするため、物かげを探して汽車より離れたところ、